書 評

デモラリゼーション
―「意気消沈」をどのように援助するのか―

玉田　有，大前　晋，古茶大樹 編著
金剛出版
2025 年 6 月　216 頁
本体価格　3,600 円＋税

本書は，タイトルどおり「意気消沈」と訳されるデモラリゼーションをめぐる論集である．それは，「差し迫った問題に対処できず，失敗体験が続くことで無力感や絶望感，孤立感が深まった心理状態」(p.15）であり，うつ病とは似ているが非なるものとされる．かつて『病いの語り』（Kleinman, 1996）を訳したとき，demoralization と remoralization の訳語に難渋したことを思い出す．これらは，疾患や障害という枠組みの下層の，意欲や感情が多様に渦巻く部分とかかわる部分なのだろう．

本書は理論編と実践編に分かれ，古茶の序文と，続く玉田と大前の理論編（総論）は，この概念が DSM-5-TR や ICD-11 に掲載され，いかに精神科臨床の領域で注目されるようになったかを明快に示してくれる．後半の実践編では，緩和ケア（中川東夫），リエゾン（安井玲子），慢性うつ病と統合失調症（越膳航平），ASD（佐々木雅明），学校教職員（秋久長夫），リワーク（久山なぎさ），看護師の視点（林田由美子），患者と支援者の心理支援（館野由美子）と続き，いずれもその分野への架橋の可能性や課題を，具体的・詳細に提示している．

評者はこのエレガントな装丁の論集に衝撃を受けた．それは長らく精神科の慢性期病棟を受け持つ経験からであり，さらに，関心を抱く文化精神医学や力動精神医学史との関連からである．そのいずれの部分も，深い部分でインスパイアされる内容なのである．

まず精神科の慢性期医療という文脈．長期の入院病棟を受け持ったことがある読者であれば容易に想像できると思うが，そこで問題になるのは「疾患」のみではない．加齢とともに心身とも脆弱化し，身寄りや住まいもなく，経済的にも行詰まり，施設入所と言われても不安や困惑が募り，自棄的となって意気消沈する患者は多い．彼や彼女に，いかに意欲を落とさずに安心して過ごしてもらうかがカギとなる．症状やその再燃に見えるものも，じつは心理社会的背景が深くかかわっている．demoralization というきわめて人間的な領域を何とかしないといけないのだが，この部分が注目されることは稀である．かかわる側の「勤続疲労」や「バーンアウト」もこの士気低下と深く関連がありそうだ．

文化精神医学の関連でいえば，「苦悩の慣用表現（idioms of distress)」（Nichter）や統合失調症の「社会的挫折（social defeat)」理論（Luhrmann）がすぐに頭に浮かぶ．ここでは，Frank & Frank の『説得と治療』でも引用されている「(聖地）ルルドへの旅が落胆するようなものになることなど決してない」(邦訳 p.129）という宗教や信仰部分にも注目したい．この領域はシャーマンや聖地巡礼がなぜ，治癒しない疾患や障害や苦境を癒すのかという大きなヒントを与えてくれる．疾患や障害レベルではどうしても右肩下がりの経過になってしまうが，その際に，あらためて「その気になってもらう」ための，医療人類学や精神療法的アプローチが十分活きる部分だからである．

最後に精神医学史的な部分．意気消沈のもとになる「アンヘドニア（anhédonie)」という用語の初出は，Ribot の後期の著作『感情の心理学』(1896 年）である．「痛覚脱失（analgésie)」と対比させた新たな造語であると記されている．Ribot は代表の病理三部作や各国心理学をまとめた後で，情念や感情をテーマにした著作を上梓した．それはコレージュ・ド・フランスの講座を継いだ Janet の社会的感情論（1924～1925 年の講義テーマ，講義ノートは『愛と憎しみ』1932 年参照）へと受け継がれていく．そして Janet は，確固とした疾患や妄想という枠組よりも，その下層の感情や信念レベルの問題として出来事を解きほぐそうとしたように評者には思える．

読後に，本書のテーマである，多少の症状や障害があっても，意気消沈や士気低下に至らない工夫をできないかということを考えた．そのためには社会的な施策とともに，医療や看護やケアする側の視点の何かが変わらないといけないのだろう．いまだ手つかずの広大な休耕地があり，その臨床的な大切さを改めて喚起する，本書は重要な意味をもつ一冊である．

（江口重幸）

doi：10.57369/pnj.25-143